

刊行にあたって

晴れて大学生となったみなさん。いろいろなことをこれから思う存分楽しむぞと、わくわくしていることでしょう。新しい友人、サークル活動、ボランティア、バイトにスポーツ……夢はどんどんふくらみますね。この本は、楽しく大学生活を送るためにまっ先に手に取る本です。

これは、大学を楽しもうと思っている人のために、現役大学生と大学院生たちが工夫をこらして書き上げた本です。本当に大学生活を満喫しようと思ったら、勉強を避けて通ることはできません。とは言え、大学4年間は机に向かってばかりで過ごすわけにもいかない時期です。なぜなら、この時期はみなさんが一生をどう過すかじっくり考え決断するために、いろいろなことにチャレンジしなければならない時だからです。マルチタスクでいろんなことをこなしていかなければ、あつと言う間に過ぎてしまいます。授業の勉強も、ほかのことと折合いをつけながら取り組んでいかなければなりません。この本はそのやり方をアドバイスしています。そして、勉強を他のいろいろなことと結びつけて、みなさんの一生を豊かにするために役立つものにしていこうと提案しています。

でもみなさん、大学の勉強を楽しむにはコツが必要です。この本には、その方法がみついています。著者の現役大学生、大学院生たちが、みなさんと同じように大学での勉強の仕方で戸惑い悩み、先生から教わったり、先輩からアドバイスを受けて、友だちとともに試行錯誤を繰り返したりしながら、身につけ編み出した方法を惜しむことなく伝授してくれます。世にレポート本はたくさんありますが、それとは一味も二味も違った学生ならではの知恵が満載されています。

どうぞみなさん、この本を読み、楽しんで勉強をするすべを身につけ、大学生活を意義あるものとし、そうして実り多い人生の基礎を作ってください。

この本の著者たちについて

慶應義塾大学の日吉キャンパスは、多くの学部の1、2年生が集う場所です。このキャンパスにある教養研究センターでは、学問の方法・論文の書き方を教える「アカデミック・スキルズ」という授業を開講していますが、この授業の修了生の有志が修得したスキルをもとに、図書館内で学習相談員として後輩たちにアドバイスする活動をしています。活動を通じて、学生の勉強に関するつまずきの石についての知見と、それに対する有効な対処のし方が学習相談員たちの間に蓄積されてきています。それらをまとめあげたのがこの本です。

この本は、複数の学習相談員が書き上げた原稿をもとにして作り上げられました。編集作業は主に、著者の一人である間篠剛留君が担当しました。ただし、内容についての一切の責任は、監修者である教養研究センターが負っています。

2014年9月10日

教養研究センター所長	不破	有理
同副所長	大出	敦
	篠原	俊吾
	種村	和史

はじめに

本書は、学習相談を担当する学生が書いた、大学での学び方についての本です。大学の先生が書いた本ではありませんので、学生ならではの視点が多く取り入れられています。特に、以下のような人たちにおすすめです。

- ・レポートに取り組んでみたものの、うまく進まない。
- ・アルバイトやサークル等で忙しく、レポートに十分な時間を取れない。
- ・期末試験勉強とレポート作成のバランスがうまくとれない。
- ・高校の頃は勉強が苦手ではなかったのに、大学に入ってからうまくいかなかった。
- ・基本的に欲張りである。

「学生ならではの視点」というと、効率の良い単位の取り方や、バレない（と思っているのは本人たちだけの）コピーレポートの作り方、楽勝科目の見分け方、などを思い浮かべるかもしれません。しかし、本書の狙いは少し違います。ひとまずは、無難にレポートを提出するということを狙うけれども、それが達成できれば次回のレポート作成時にはさらに質の高いレポートを書くことができる。こうしたことを狙っています。

本書のもととなったのは、慶應義塾大学日吉図書館で2008年から行われている、学生による学習相談の取り組みです。この取り組みは、同大学教養研究センターが開設する科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が「ピア・メンター」と呼ばれる学習相談員として図書館の窓口につき、学習に関する学生からの相談に対応する、という活動です。レポートの書き方についての相談を中心に、これまでに1,000件以上の相談を受けてきました。

活動を通してわかったのは、それぞれの抱えた悩みやつまずきのポイントは、実はその人特有のものではなくて、多くの人に共通したものだ

ということでした。また、そうした悩みはレポートの書き方本を読むだけではなかなか解決できない、ということも実感できました。学生のぶつかりがちな悩みに対して、学生目線でアドバイスする。こうした視点の本は今までなかったのではないかと思います。

大学生には時間があると言われますが、実際にはそんなに暇でもありません。日々の学業だけでなく、サークルやアルバイト、資格試験の勉強、インターンシップなどなど、やりたいこと、やらなければいけないこと、やった方がいいことはたくさんあります。そんな学生にとって、全ての科目・全てのレポートに十分な時間と労力を割くことは、現実的には難しいことが多いでしょう。実際、必修科目や語学の試験準備に追われてレポートにはほとんど時間が取れない、という相談もありました。「ここまでできれば理想的なんだけれど、そうは言っても時間が……」となるわけです。

1本のレポートにたっぷり時間をかけた場合、他の科目の課題や試験勉強がいい加減になってしまうこともあり得ます。サークル活動やアルバイトとの並行も難しくなります。従来レポートの書き方の本は、この点についての目配りが少なかったように思います。

大学は学問の場であるというのはもっともです。しかし、そうは言っても、大学生として打ち込むサークル活動やアルバイトにも、やはり大事な意味があるはず。学生は欲張りであっていいはず。サークル活動も社会経験もあきらめずに、学業でも一定の成果を残す。これは実現可能です。本書には従来レポート本には書かれていないような工夫も盛り込まれています。私たちはこれを正攻法の工夫だと思っています。

大学に入ったばかりの学生にとって、多くの科目で課されるレポート課題は大きな壁として立ちどころです。レポートを書くためには、講義を丁寧に聞き取るだけでなく、自分で問題を設定し、自分なりの問題解決に取り組んでいかなければなりません。これは大変な作業です。し

かし、それこそ大学での学びでしょうし、そこで身につけた力こそ、社会に出たときに求められるものでしょう。

第1部では、基本的なレポートの書き方を説明しています。悩みごとに内容を分けていますので、どこから読んでも構いません。ここから、レポートの基本を学び取っていきましょう。

第2部では、基本的なレポートの書き方を踏まえて、もう少し実践的な点について説明を行っています。失敗例を示しながら説明していますので、自分の書いたレポートやノート、自分の立てたスケジュールと比べて検討してみてください。きっと役に立つはずですよ。

Contents

刊行にあたって	3
はじめに	5
第1部 基礎編	11
第1章 レポートってそもそも何？ 何をすればいいの？	13
(1) レポートの大原則	13
(2) レポートの型	19
(3) レポートは読者とのコミュニケーション手段	21
第2章 提出まで時間がない！ 最低限やるべきことは？	24
(1) 脱・ダメレポートのための最低ライン	24
(2) 課題の条件を満たす	32
(3) 課題別の対処法	33
(4) 効率よく時間を使うために	38
第3章 参考文献って何？ どう使うの？ どう書くの？	45
(1) 参考文献は何のためのもの？	45
(2) 参考文献一覧の書き方	48
(3) 参考文献のその他の使い方	50
第4章 他人の考え（引用）だらけ！ どうしたらいい？	52
(1) なぜ引用だらけになってしまうのか	52
(2) 問いを立てるために	54

第5章 「自由に論ぜよ」って言われても、 一体どうすればいいの？	57
(1) テーマを設定するには	57
(2) テーマを設定する時の注意点	59
(3) テーマ設定の例	63
第6章 資料がうまく見つからない！ これって探し方が悪いの？	72
(1) 資料を探すためのキーワードがわからない？	72
(2) テーマや資料を限定しすぎ？	77
(3) どうしても見つからない	80
(4) その他の検索テクニック	81
第2部 発展編	83
第1章 ノートの取り方・活用の仕方	85
(1) 「脱・板書丸写し」の心構え	85
(2) ノートテイキングのコツ	87
(3) ノートの例	93
(4) ノートをフル活用しよう——問いとの連関——	103
第2章 スケジューリングの方法	106
(1) スケジューリングの失敗例	106
(2) レポートに取り組むためのスケジュール管理	114
(3) スケジュール例	115
(4) レポートの手順のポイント	119
(5) レポートを効率よく進めるコツ	124

第3章 ダメレポートを改稿する	131
(1) 事例1	131
(2) 事例2	139
第4章 書評レポートの書き方	149
(1) 書評レポートってどんなもの?	149
(2) 書評レポートの構成	150
(3) 書評レポートの失敗例	152
(4) 書評レポートの取り組み方	154
第5章 プレゼンテーションへの応用	158
(1) プレゼンの心構え	158
(2) プレゼン準備の手順	160
(3) スライドの悪い例、改善例	169
(4) プレゼンならではのポイント	173
(5) こんなプレゼンはダメ!	175
おわりに	178

第 1 部



基礎編

大学に入学してしばらく経ち、新生活にも慣れてきたかなと思う頃、多くの方は初めてのレポート課題に遭遇します。最近ではかつてよりもレポートの書き方を教える科目が増えていると言われます。しかし、それでも戸惑う人は多いでしょう。「レポートって一体何なのか、結局わからない!」、「他人の意見の羅列になってしまう……」、「提出直前なのに全然手がついてない!」、などなど、いろいろな悩みが出てくるはずです。

第1部では、レポートの基礎・基本を学びます。ある程度の順序を考えながらも、各章はレポートに関する悩みごとにまとめました。実際につまずいてしまっている人は、今自分が何に困っているかを考え、その章を読んでみてください。切羽詰まっている人は、まず2章を読んでおくといでしょう。時間が限られた中で、最低限何に取り組めばよいのかを書いておきました。

差し迫った課題のない人は、最初から順に読んでみてください。実際の悩みに沿ったアドバイスから、レポートへの取り組み方が自然とわかってくるはずです。最初から完璧なレポートが書ける人はいません。少しずつステップアップしていれば大丈夫です。

1 | レポートってそもそも何？ 何をすればいいの？



(1) レポートの大原則

「参考文献を使ってレポートを書きなさい」と言われたら、どんな文章を書きますか。参考文献が何のことかわからないし、そもそもレポートがわからない。そんなときにありがちなのは、次のような失敗です。

- ・ 本や雑誌記事の内容を切り貼りして、とにかく字数を埋める。
- ・ 勉強したことを一から全部書く。
- ・ 斬新なアイデアを無理に出そうとする。
- ・ 道徳的に立派なことを書こうとする（例：環境問題について国民一丸となって対処すべきだ）。
- ・ 何かの決意表明をしようとする（例：これからもっと勉強しようと痛感した）。

勉強したことを切り貼りして字数を埋めるだけでは、レポートとしては不十分です。また、「独創的なアイデアや、何か道徳的に立派なことを書かなければならない」というのもレポートに対する間違ったイメージです。レポートは何らかの決意表明をするものでもありません。

では、レポートの文章とはどういったもののでしょうか。それは、一つの問いを立て、その問いに対する答えを客観的・論理的な議論によって示した文章です。このことがレポートの大前提となります。

ポイント

- ・ レポートとは、客観的・論理的な文章である
- ・ レポートの基本は、
 問い + 答え + 答えを導く議論（理由+客観的根拠）

もちろん、この説明だけではピンと来ないでしょう。簡単な例を出して、確かめながら考えていきましょう。実際のレポートは2,000字以上のものがほとんどですが、ここではそれをぐっと短くして、400字程度にしてみます。レポートの課題は「教育課程編成の基準である学習指導要領について、自由に論ぜよ」であったとしましょう。さて、次の文章はレポート的な文章といえるでしょうか。

<例1> 単なる授業のまとめや情報の羅列だけではダメ

戦後日本の教育について説明する。第二次世界大戦中の日本では、教育内容や方法が画一的なものだった。これに対して、戦争が終わって1947年に文部省から出された「学習指導要領（試案）」はあくまで教師のための「手引き」であった。つまり、子どもが置かれている生活の実情に即して教師が創意工夫できるようになったのである。1951年の試案ではその傾向が一層強化された。しかし、そうした中で学力低下に対する不安の意見が増えていった。1958年に出された学習指導要領では「原理、原則あるいは基本的なものをしっかり身につけていく」ことが大事だとされ、教育課程はもう一度中央集権的なものになった。さらに、1968年の学習指導要領では、教育内容の現代化が目指された。すると教育内容が高度になったことで「落ちこぼれ」と呼ばれる子どもが増え、1977年の学習指導要領では「ゆとり教育」が目指され、人間性が重視されるようになった。しかし、このゆとり教育にもたくさんの批判がよせられた。そして、ゆとり教育の見直しが検討された。教育についての考え方はこのように変化してきた。

さて、いかがでしょうか。しっかり書けている、と思ったかもしれませんが、これは授業やその他の資料の単なるまとめであって、情報の羅列でしかありません。一番の問題は、「この文章で何を問題にするのか」という「問い」がないことです。問いがはっきりしていなければ、答えも、それを導く議論もはっきりとはしません。この文章をレポートの一部分にすることはできるかもしれませんが、この文章の調子で全体

が書かれてしまうと、それはレポートとして不十分です。

では、次の文章はどうでしょうか。

<例2> 自分の個人的な主張や感想を語るだけではダメ

学校教育において教え込みは悪なのだろうか。私はそうは考えない。「教え込みは悪だ」と言う人の多くは、自由な思考が優先されるべきだと主張する。確かに自由な思考は大事なものだろう。しかし、彼らはなんとなくのイメージから自分勝手に「生きる力」とか「ゆとり」とかを叫んでいるだけなのだ。しっかりと物事を考えるためには、知識が必要である。実際、私も自由に物事を考えられるようになったと思えるのは、しっかりと勉強をしてからである。それ以前は何も考えられなかった。だから、教え込みは悪ではないし、教育現場から追放すべきものではない。実際、ゆとり教育を行って学校現場はどうなったか。いじめや非行は増加し、教育現場は困難な状況に置かれている。子どもたちの学力はひどく低下してしまった。やはりきちんとした基礎基本を小学校の頃から教えなければならぬ。それが社会のためにもよいことだし、その子自身の幸せのためにもよいことだろう。

問いと答えは最初の2文で示されています。答えを導くための理由も、その後書かれています。しかし、その理由を支える客観的な根拠がここにはありません。いじめや非行は増加し学力は低下した、というのは本当でしょうか。**どんな根拠があってそう主張するのでしょうか。**誰かが言っていたのを耳にしたのかもしれないですが、それでは「なんとなくのイメージ」から物事を語っているだけです。

レポートは読む人を説得するためのものです。「自分の出した答えは正しいんだ!」ということをアピールするためには、理由と根拠を示す必要があります。ただ感情的に心に訴えかけても、「私は別にそうは思わないけど……」と言われたら説得できません。では、どうすればよいのでしょうか。そこで必要なのが、**自分の考えを客観的な根拠に基づいて論理的に示すこと**です。「客観的に見て●●だから、こう考えられるん

だ！」と言えればいいわけです。

では、客観的な根拠を示すためにはどうしたらよいでしょうか。そのためには講義内容を整理したり、書籍や雑誌論文を読んだり、何らかの調査を行ったりといったことが必要になってきます。自分の個人的な体験を出したり「誰かがどこかでそんなことを言っていた気がする」と言うだけで、根拠として不十分なのです。「この人がこの本でこう言っている」、「こうした事件があった」、「こんな調査結果が出ている」など、**レポートには明確な根拠が必要です**。読者がいることを考えて、冷静に議論を行うことが、レポートでは求められているわけです。

ポイント

- ・レポートには読者がいる
⇒読者にわかってもらえるような客観的根拠が必要

多くの人は忘れがちなのですが、レポートには読者がいます（たいていは担当の先生ですが、ゼミの同輩も読者になります）。そして読者がいるということは、その人にメッセージを伝えるということです。つまり、レポートとは、言ってみれば**コミュニケーションの手段**なのです。

コミュニケーションと言うと、慣れ親しんだ人とのコミュニケーションを考えるかもしれませんが、しかし、大学や社会で必要になってくるのは、**親しくない人とのコミュニケーション**です。初対面の人や自分を全く知らない人に対して、誤解なくメッセージを伝えるためにはどうしたらよいか、考えなければいけないわけです。それを突き詰めると、「わかってくれるだろう」という甘えをなくして、できるだけ丁寧に、できるだけ客観的・論理的に書くのが大事だ、ということになります。

では、次の例を見てみましょう。

<例 3> 客観的根拠を大事にして文章を書く

講義で説明されていたように、教育課程についての考え方は、教科の内容をしっかりと教えようとする系統主義と、子どもの生活経験を重視する経験主義との間を揺れ動いてきた。授業で扱った学習指導要領の変遷はこのことを示している。では、現代の学習指導要領はそのどちらに基づいたものなのだろうか。

2000年代になって「ゆとり教育」の是非をめぐる教育論争が激しくなり、2008年には学習指導要領が改訂された。学力低下が問題になったことを受けての学習指導要領改訂だったので、系統主義へ傾いたと言えるかもしれない。実際、小学校学習指導要領には「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ」とある⁽¹⁾。しかし、それはあくまで「創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で」行われるものだとも書かれているし、「個性を生かす教育の充実に努めなければならない」とも書かれている⁽²⁾。この点だけを見れば経験主義とも言える。系統主義か経験主義かと言われても、判断するのは難しい。

以上のように、最新の学習指導要領は系統主義の特徴も経験主義の特徴も持っている。「系統主義か経験主義か」という考え方を抜けて、より建設的に学校教育を考えようとしていると言える。

⁽¹⁾ 文部科学省『小学校学習指導要領』、東京書籍、2008年、13頁。

⁽²⁾ 同上。

問い

答えを導く
議論

答え

脚注で
根拠を示す

どうでしょうか。ぐんとレポートらしくなったのではないのでしょうか。この例では「問い」と「答え」、そして「答えを導く議論」がはっきりと書かれています。実際のレポート課題ではこれよりも長いものが求められますし、このレポートには不十分なところも残っています（例えば、「講義で説明されていたように」の部分はもう一度別の資料で調べ直すのがよいでしょう）。しかし、こうした書き方がレポートの基礎になります。特に2番目の段落、理由を示した部分が重要です。ここでは、「最新の学習指導要領は系統主義の特徴も経験主義の特徴も持っている」という答えを出すための理由が述べられているのですが、その根拠として学習指導要領の実際の表現が取り上げられています。**出所がはっきりとわかる客観的根拠**を示すことによって、説得力を強めているわけです。

文章中の小さなカッコは脚注番号といって、ページや章などの最後に補足説明があることを表しています。ここでは文章の下、線で区切られた後に各番号の説明があります。「実際に学習指導要領にこう書かれているんだ」ということを示しているわけです。このように注をつけておくと、「本当にそう書かれているのか？」と読者が疑問に思ったときに、読者自身が確かめることができます。**他の人が確かめられるようなフェアな議論を行う**というのも、レポートの大事なポイントです。

さらに気をつけてほしいのは、客観的根拠と自分の考えとを明確に区別している点です。(1)・(2)の注の付いた箇所を見てください。ここでは「小学校学習指導要領には～とある」、「～とも書かれている」というように、断定的に書かれています。「本の中にそう書かれている」ということは事実なので、断定的に書くことができるわけです。その他、歴史的な事実や実験で出た結果、調査結果なども断定的に書くことができます。それに対して、2・3段落目には、「～とも言える」、「～と考えられる」といった表現もあります。推測や自分の判断が入っている書き方ですね。自分で考えた部分は、このようにして客観的事実から区別することが大事です。自分の意見を示すためにはこの他に、「～だろう」、「～と予想される」、「～と思われる」などのような書き方があります。

さて、もう一度、レポートの基礎を確認しましょう。レポートとは、

「問い+答え+答えを導く議論（理由+客観的根拠）」から成り立っています。そのレポートで問題にするのは何なのか。その答えは何か。なぜそう言えるのか。理由を導く客観的根拠はどこにあるのか。これらを満たすものが、大学で取り組むレポートです。なんとなくの印象で書くのではなく、一つひとつ確かめながら、確実なことを積み重ねて、相手を納得させるように書いてください。

ポイント

- ・ レポートは、「問い」を立て、問いに対する「答え」を導くもの
- ・ 答えを導くためには、出所のわかる客観的根拠が必要
- ・ 客観的根拠と自分の考えとをはっきりと区別することが大事
客観的根拠：「～である」、「～は～と言っている」など、
断定的な書き方に
自分の考え：「～と考えられる」、「～と言える」など、
判断を示す書き方に

(2) レポートの型

では、レポートの基本的な要素がわかったとして、それをどのように並べていけばよいのでしょうか。最も基本的なレポートの型は、「序論」・「本論」・「結論」です。先ほどの「問い+答え+答えを導く議論（理由+客観的根拠）」をこのフォーマットに当てはめることで、レポートの形式を満たすことができます。大まかに言えば、次のような形になります。

序論＝問い（＋レポート全体の見通し）

本論＝答えを導く議論（理由＋客観的根拠）

結論＝答え（＋レポート全体のまとめ）

どのような「問い」に答えるのか、なぜその「問い」を扱うのか、その「問い」に対してどのような「答え」を述べるのか、どのような議論

によって答えへと至るのか、という**見通し**を立てるのが「**序論**」です。読者がスムーズにレポートを読めるようにするわけです。

先ほどの〈例3〉では、「講義で説明されていたように」という言葉から始まって講義を振り返り、自分の「問い」につなげています。問いが大事だと言われても、いきなり問いだけを書くのは親切ではないですよ。書いている本人にとっては大事な「問い」でも、他の人にはそうではないかもしれません。ここでは、**なぜその問いを扱うのか示す**ことで、読者が読みやすいように工夫しているわけです。講義内容や新聞記事や書籍に書かれていた一般的な話題から入り、自分で設定した問いにつなげていくと、スムーズな流れができます。

次に「**本論**」では、「序論」の見通しに従って、「答えを導く議論」を実際に書いていきます。ここで必要なのは、**読者が迷子にならないように「答え」へと案内すること**です。ですので、できるだけ客観的に、論理的に話を進めていくことが求められています。先ほど説明したような、「**理由と客観的根拠**」を、わかりやすい順番で並べてください。

最後の「**結論**」では、この**レポート全体をまとめ、レポートの中で出した答えをはっきりと示します**。どのような「問い」を設定し、どのような議論を行い、どのような「答え」が出せたのかを書くわけです。場合によっては、ここで今回は扱えなかった点を取り上げ、今後の課題として示しておくのもよいでしょう。また、今回自分が出した答えをもとに、実際的な応用を考えて示すこともあります。ただし、「いろいろとわかって勉強になった」、「～の歴史に感心した」などの**感想は書かない**ようにしてください。先生へのアピールになるところか、逆効果です。レポートはあくまで客観的な文章ですので、感想が入るとそれだけで質が下がってしまいます。「がんばったので単位をください」というお願いも、逆効果にしかありません。

こうした流れがレポートの基本的な型です。レポートの基本的な要素である「**問い+答え+答えを導く議論（理由+客観的根拠）**」をわかりやすく提示できるように、「序論・本論・結論」を組み上げてください。

レポートの基本的な型

- ・序論：レポート全体の見通しを立て、「問い」をはっきり示す
 - ・本論：見通しにしたがって「理由と客観的根拠」を示して、読者を答えへと案内する
 - ・結論：「答え」をはっきりと示して全体をまとめる
- *感想は書かない

(3) レポートは読者とのコミュニケーション手段

先に書いたように、レポートとはコミュニケーションの手段です。レポートを書くとき、**それを読む人がいる**ということを考えることはとても重要です。

では、読者を意識することで、レポートの取り組み方はどう変わるのでしょうか。何かプラスになることはあるのでしょうか。まず、**誤字・脱字や形式上のミス**を減らせるということがあります。レポートを書き上げた後、ようやく終わったと思ってそのまま提出する人がいますが、読む人のことを考えるとこうはならないはずで、誤字・脱字などのミスがないよう、一通りチェックすることが大切です。中高生のとき、誤字・脱字の多い先生を信頼できましたか？ 読む人のことを考えれば、自然とミスチェックにかかる労力が生まれるはずで、それができない人は、なかなか信頼されません。人からの信頼を得るためにも、読者のことを考え、ミスチェックを行うことは重要です。

さらに、読者を説得するように書くことで、**自分の考えをより注意深く、はっきりとしたものにする**ことができます。レポートを書くときには、気心の知れた仲間や家族との間で「これくらいはわかってくれるだろう」と思って話すのとは全く異なった形でのコミュニケーションの方法が必要となります。いつもなんとなくでしか考えていなかった物事をはっきり考える必要が出てきます。また、**違う立場のことを考えられるようになる**というのも大きなポイントです。レポートでは、他者の質問

や反論に対応できるような準備が不可欠です。そのためにはあらかじめ他者の反応を予想しておく必要があります。こうした準備を繰り返しているうちに、自分の立場とは異なる立場について考えられるようになるわけです。

さて、このように書くと、他者に向けて書くことは大変なものだと考え、ためらう人も出てくるかもしれません。しかし、大変なものであるからこそ、得るものも大きいわけです。読者を意識してレポートを書くことによる効果は、最終的には**自分の世界が広がる**というところにつながっていきます。全く面識のない他者に向けたメッセージを発することができるようになるわけですから。このようにして身につけた力は、様々な場面で大いに役に立つでしょう。

ポイント

読者を想定して書くことで、

- ・ 誤字・脱字などのミスが減る
- ・ 自分の考えがより明確になる
- ・ コミュニケーションの世界が広がる